

マイクロ・ディレクターズ・トーク
2012年10月30日の記録



MICRORESIDENCE! 2012

アーティスト・イン・レジデンス、マイクロレジデンスからの視点
Artist in Residence, from a Micro Perspective

マイクロ・ディレクターズ・トーク・2012 年 10 月 30 日の記録

目次

1 前書き

2 ディレクターズトーク

8 ラウンドテーブルディスカッション

マイクロ・ディレクターズ・トーク・2012 年 10 月 30 日の記録

「MICRORESIDENCE!」特別企画の一部として 2012 年 10 月 30 日に遊工房は世界中のマイクロレジデンスの活動を検証するためにディスカッションイベントを開催しました。このイベントは、アーティスト・イン・レジデンスの世界ネットワークである Res Artis の世界総会が東京で開催された機会に合わせ実施し、世界中から多くの方々の参画を得て開くことができました。アジア、ヨーロッパ、オセアニア、中央アメリカの 7 人のマイクロディレクターからの各レジデンスの特徴と現在取り組んでいる問題の紹介、その後、アーティスト、ディレクター、キュレーター、アートサポーターなど、様々な背景をもつ参加者も加わり、レジデンスとアート関係者との新たな繋がりとなるプラットフォームとしてマイクロレジデンスの役割を議論する機会にもなりました。このよう多様なアート関係者の集まりを実現することでマイクロレジデンスの重要な活動への認識を高める事ができたと共に、ディスカッションで出来てきた議論、また夫々のレジデンスとの繋がりがより深まり展開していけば良いと思います。この別冊ではマイクロレジデンスディレクタートークと、その後のラウンドテーブルディスカッションについて、コメントを含めて議事録としてまとめています。

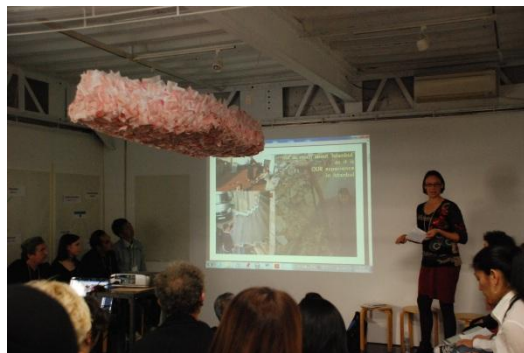
Youkobo Art Space



遊工房アールスペースーアーティストをフレキシブルに支援する東京のマイクロレジデンス自らの体験から実現を図った、滞在型制作スペースを提供し共に学ぶ場、機会の創出としての遊工房の活動をはじめて20年以上が経過した。AIRとは基本的にアーティストの創作館であり、その滞在の目的は、制作集中や、リフレッシュのために自国の創作環境から積極的に逃避するなどの、様々な理由による。アーティストが、異文化の中に入り込み、生活者の視点で活動のできる

状況の提供が、重要なことであると思う。職業としてのアーティストの存在、社会のアートに関わる変化と共に、AIRが社会の器としての存在となるよう努力したい。

Caravansarai



Caravansarai は、イスタンブール（トルコ）の中心街、金物店の集まる地域にある、アート施設である。トルコ特有の事柄に特化するのではなく、共同ディレクターである我々、ジュリー・アップメイヤーとアン・ウェシンスキーが外国人として体験したこと、イスタンブールの日常生活や芸術・文化の状況を見続けてきて感じたことに基づいて活動している。

滞在アーティストは、一緒に友達の自宅を訪問する等、我々の生活に入り込む。滞在アーティストというより、ゲストであるような感覚である。もともと自主的に始まった活動であり、文化政策等に関する行動計画は無い。それより、創作活動のための積極的な場を目的にしていた。「何もしないという権利がある」ということが一つの利点だと思っている。

二人だけで運営しているので、雑に見える時もある。宣伝が十分出来てるとは言えず、地元での認識度より、国際的な認識度の方が高い。結果的に、聴衆がどのように存在しているかという問いを余儀なくさせられ、地元と国際的にどのような反応があるか強く意識しようとしている。私たちの活動は、全て個人として、ゲスト・アーティストとコミュニケーションを持ち、滞在成果の評価以上に、コミュニケーションを大切に、アーティストにとって滞在経験は、価値があるのかというところにある。

コミュニケーションを重要と考え、アーティストたちは私たちの生活にも関わることで、滞在アーティストとしてというよりもゲストとして宿泊しているようでもある。将来に向けての希望は、レジデンスが作品やリサーチを行うところであると理解されるようになってほしいと考えている。

Caravansarai は、三つの手段で活動を展開している：

①アーティストの公募

②共同制作；他のプロジェクトと関わること。

③自分達でプロジェクトを展開し、他のアーティストを招聘すること。

将来の夢：

①単なるサービスを提供している施設だけではなく、他のアートのスペースとの新たな関わりを通して、レジデンス自体がアート作品や研究の創造の場であると認識されること。

②レジデンスの分野と関係者が、専門知識を高め、アーティストの作業に対して、報酬があること。

③活動のエネルギーを継続させること。その流れをバランス良く整えていくことによって目的の実現へ近づけられる：

「Caravansarai とは、思考とエネルギーを発するオアシスであり、古めかしいバザールを、現代美術実践の拠点とすることだ。

Homebase



私自身がアーティスト、アート・レジデンスのディレクターとして受け入れてくれた遊工房へ、感謝申し上げます。

Homebase の原型

2001 年より、ニューヨークを拠点に展開。多くの滞在者が何かを実現するために住んで、達成したら出てしまうという、この異常な都市に圧倒された。ギャラリーの世界以外に、アート界には何があるのか、探し

続けた。

アイデンティティーの形成や、「家」という概念がどのように作られているのか、またはアーティストとして社会とどのような繋がりがあるのかに関心を持ち、2006 年に「家」というテーマについて、独自のアーティスト・ラン・レジデンス兼リサーチプログラムを開催した。プロジェクト自体が作品のようにも思われ、有意義な都市の変化・社会の変化に対してアーティストの役割を問われることにも関連している。

アートとは、相関性のための道具だと個人的に考えている。Homebase は、アーティスト集団のコラボレーションによって作られているのである。変化している場所の空いている建物に居住し、20 人の国際アーティストと社会学者を集め、一ヶ月の滞在リサーチプログラムに参加した後に、一ヶ月の充実した文化プログラムを公開するというを行っている。

原型：

空いている建物を住居にする／一時的な「家」を示す→滞在リサーチプログラム→文化プログラム→記録

我々は、「家」というものを個人・近所・地域との関係から思考している。Homebase は、拡大する探検であり、空間と空間へ移動する旅のようなものでもある。遠隔の場所にある空間を占有しながら、臨時のコミュニティーセンターとして機能し、そのような取付けを企画するだけでなく、ワークショップや料理、ゲーム等を通してその近所の状況・問題を顧みる機会も与えている。

今後の課題

アートがどのように、存在しているシステムと繋がるのか、どのように社会的な範例を変えるのか、集団力学や社会学からの問いをどう挑戦して応えるか 最終的に、アーティストと地域が直面している問題や争いは、レジデンス運営者の営みの中心である。また、支援金や他人とうまく関わるための新たな道具が必要になってきている。我々が考えているこの新たなマイクロレジデンスのプラットフォームでは、資源が少ない中、私たちの活動をカブける方法を求めざるを得ない。

Arquetopia



Arquetopia のフレームワークは、70 年代の国際規範に基づいて、2009 年に作られた。アーティストの立場や、創造的多様性、文化的多様性や文化横断的な対話への投資（UNESCO）、文化と継続可能性について彼らの勧告を使用した。これらのガイドラインには、素晴らしい概念が含まれているが、どのように現実に来るのか；どう食べていくか、どうスタッフに支払えるのか等は分らない。

2009 年には、主に教育プログラムを企画して、社会の変化と発展の進度に焦点を当てていた。2010 年末を見ると、活動の中心として、継続可能な発展へシフトすることを決めた。四つの原則を融合させることを決めた：社会意識、社会的責任、革新と地場のネットワーク。

現在、プエブラとオアハカという地方に根付いた活動をしている二つの施設がある。これから、2009 年と 2011 年の間に変更したプログラム内容に従って、どのような変化があったか、まとまった計数で表す。

Arquetopia は、完全に独立した運営をしている；3 年間の予算を通して、僅か 2 パーセントが公的資金からだった。主な収入は、我々の活動からでありながら、取締役会のメンバーも収入を探す責任もある。2011 年と 2012 年の間の一年間、収入が 150 パーセント急増してきた。コラボレーションの数、提供した雇用、滞在したアーティスト数も、この短い期間で急増した。

これは、どのように達成出来たか：メキシコの文化領域において、元々長年主要な収益となったが、需要が見つからずに失われた資源を探した。例えば、天然色素、陶芸、金箔、木彫り等、300-400 年間その地場の経済の一部だったものである。それから、アイデアやサービスをものと交換し、最終的に利益とした。

例：

・ Arquetopia からの視点：

アーティストにレジデンスの機会を与える→工業デザイン→特許ライセンス→現金

・ アーティストからの視点：

技術がある→レジデンス機会→デザインを作る→作品が出来る

・ 地域からの視点：

陶芸工場との共同制作→新しいアイデア→作品のライセンスが収益と繋がる

結果的には、この経過を通して、地場の陶芸産業の再興になり、地域に利益を還元できるようになる。

Big Ci



Big Ci とは、省略したタイトルであり、「Bilpin International Ground Creative Initiative」（ビルピン国際地域創造機構）を意味している。独立しているアーティスト主導の非営利アート施設であり、4・5年間のリサーチと準備を経て、2011年に最初のアーティストを迎えた。

創造的な活動の中で、柔軟な取り組みをし、新しい提案やプロジェクトに対してオープンである。レジデンス施設だけ

でなく、創造的なプロジェクトのための場を提供し、様々なキュレーターやアート・ディレクター、団体に空間を自由に使わせている。我々の役割は、そのプロジェクトを実現するための促進である。

文化・ジャンル横断的なコラボレーションを奨励している、いわば多種のジャンルで活動している異なる国籍のアーティストを出合わせることだ。真摯なアーティストへのサポートに集中し、個人的に関わっていくことで、滞在している間、心地よく過ごせるようにしている。彼らのプロジェクトを信頼し、一生懸命実現出来るよう協力している。しかし、結果は期待せず、アーティストのキャリア形成を狙い、自身のプロジェクトとキャリアが発展出来る場を提供している。

私たちににとって一番自慢できることは、滞在アーティストが新たな方向を取り、他の場所で実現不可能なものを作ることだ。都市から一時間半離れて、特異な国立公園の縁に位置している。この公園は、オーストラリアの数少ない原生環境保全地域である。言い換えれば、公園の95パーセントが完全な原始地域であり、人間が入ったことが無い。多分、世界の中でも、こう言う場所は僅かである。私たちが最も関心にあるのは、都市の環境から来たアーティストがこのような場所に滞在した時に、どのような変化が生まれてくるかということだ。

この公園は、風景だけではなく、所々に希少な植物も見つけられる。それ故に、我々は環境問題

に関して強い責任感を持ち、地元のアボリジニーの伝統文化にも関心を持っている。滞在アーティストは、ユニークな自然の体験にアクセス出来る。私のパートナーは、経験を積んだ環境研究者であり、このエリアの探検家でもある。普段アクセス不可能な場所まで、滞在アーティストを案内することも可能ということだ。

8 エーカーの面積を持ち、スタジオや、リビング・ルーム、パフォーマンスと公的講演に適した空間の含んだ泥レンガの家等の施設がある。様々な環境プロジェクトにも関わっており、滞在アーティストが野外で作品を作ることが多く見られる。

私自身もアーティストであり、自身の個展やプロジェクトで忙しいスケジュールこなしているので、アーティストのニーズは理解出来る。この意味で、アーティストがレジデンス施設を運営することが重要だと思う。

New Zero



ミャンマーの美術について、ほとんどの人々は知らない、そしてミャンマーという国名を聞くと、アウンサン・スーチーしか思い浮かばないだろう。我々は、1990 年にアールスペースを始めて、2008 年より「New Zero」（ニュー・ゼロ）という名前を使用した。

最初の主な活動は、1 万人の死者が出た 2008 年のサイクロン・ナルギスの被災者への支援だった。政府は、僅かな支援しかししない中、ニュー・ゼロメンバーは金銭的・食料援助をし、1 ヶ月後ニュー・ゼロを会場にした、な

くなられた犠牲者のための記念式典を開催した。

設立以来、毎夏、ニュー・ゼロで子供向けの美術授業が行われ、最後に展覧会も開催している。定期的に、海外のアーティストによるセミナーも企画している。2009 年には、東南アジアのアーティストを中心に、シンポジウムやワークショップ、展覧会等を含んだ交流プログラムを企画した。2001 年より、「Japan-Myanmar Performance Art Exchange」（日本／ミャンマー・パフォーマンス・アート・交流）を企画し、2003 年、2007 年、2009 年に開催してきた。展示スペースと、スタジオ、図書室、宿泊スペースを加えた二つのスペースがある。2010 年に、海外アーティストのために、アーティスト・レジデンス・プログラムを開催し、1 ヶ月間までの滞在が可能である。

ミャンマーでは、政府による検閲が厳しく、全ての公的なイベントは許可のための申請が必要だ。作品が相応しくないと判断されると、隠さないといけない。若しくは撤去しないといけない。50 年近く、軍の支配下が続いてきた中で、一般市民には未だにアートが伝わってこない。それ故に、ニュー・ゼロメンバーの強い意志は、新しい時代のアーティストを育成することである。

Kulttuurikauppila



Kulttuurikauppila は、フィンランドの北部に位置している、「イイ」という 1 万人の人口のあるごく小さい町にある。アンティ・イロネンと 2 人の地元のアーティストが、2006 年に設立した。

現在、Kulttuurikauppila は、非営利団体である。ごく小さいマイクロレジデンスであり、一回ごとに一人、若しくは夫婦しか滞在出来ない。毎年、2-4 カ月間滞在する 5・6 人の海外アーティストを選んでいる。

アーティストのニーズに合わせたレジデンス・プログラムに取り組んでおり、展覧会を開きたいか、地元の学校でのワークショップ等やりたいか等、滞在アーティストがどうやりたいかを話し合い、一緒に企画する。様々な機会があるが、展覧会や、ワークショップ、オープン・スタジオ等の形で、レジデンスの成果を期待している。

一つのプロジェクトについて話したいと思います。今年の夏（2012 年）、イイ・ビエナーレという 2 年に一回企画している野外展覧会へ参加するために、カメルーンから来たゲストアーティスト、オリビエ・フォコアを招聘した。彼のレジデンスは、Africa Center（アフリカ・センター）との協力で、企画した。我々のプロジェクトは、様々な形で、オリビエの場合は、常設の作品を作った。オリビエの他に、6 人のアーティストも招聘され、作家や地域住民の協力の元、それぞれのプロジェクトを実現した。

Kulttuurikauppila は、一人のアーティストしか滞在できないという小さいレジデンスなので、地域とのコミュニケーションを重要にしている。食事会や釣り等、沢山の交流イベントを企画している。レジデンス・プログラムの利点の一つは、フィンランドの文化と接して、地域住民と交流し、地元のアーティストとのコラボレーションが可能であることだ。しかし、滞在の同時期に、他の海外アーティストがいないため、小さい町であるイイは寂しい場所であるかも知れない。

Art Break



Art Break は Kulttuurikauppila が出来た後設立された。2002 年に遊工房で最初のレジデンスアーティストとして滞在をした経験から、自宅を使って妻のカイサ・レラターと一緒に Art Break をスタートさせた。私たちは Kulttuurikauppila と一緒に活動し、Kulttuurikauppila に滞在できないアーティストには私たちの家に泊まってもらい、私のスタジオをシェアしている。Art Break を始めてから、遊工房とも協力的なパートナーシップを組んでおり、アーティストの交流も何回か行っている。

Studio Kura



福岡、糸島を拠点として活動する Studio Kura は 5 年間ヨーロッパで活動していたアーティストの松崎博史に設立されました。ヨーロッパで活動する間、様々なアーティスト・イン・レジデンスと出会い、日本でレジデンスに参加したいヨーロッパのアーティストも多かったため、福岡でレジデンスを開催することにしました。たんぼに広がる伝統的な蔵がスタジオとギャラリーとして使われていますので「Studio Kura」というネーミング

になりました。Studio Kura の 5 人のメンバーはアーティスト・イン・レジデンス、アート教育、デザイン制作、3つの基本プログラムを実施しています。設立してから 12 カ国の 21 人のアーティストが Studio Kura に滞在してきました。Studio Kura の経済モデルとしては滞在アーティストが文化財団から助成金を取り、設備などを自分で払っています。また大学でアーティストを紹介し、ワークショップやレクチャーを開催することで収入も得ています。現代アートを中心として活動していますが、地域の伝道的な工芸も丁寧に滞在アーティストに紹介し、工房に連れて行き、その技術、文化に触れる機会を設けています。この以外にもいろいろなアート団体やコミュニティセンターと協力し、アーティストのプランと必要に応じてこのような場所でもイベントを開催しています。

Studio Kura は福岡だけではなく、日本また海外ネットワークも強いです。たとえばシンガポールのマイクロレジデンス INSTINC とのコラボレーションプログラムによって海外のアーティストはシンガポールと福岡の 2 拠点のレジデンスに参加し、シンガポールのデザイン大学との協力によって毎年シンガポールアーティストの二人を受けています。また 2012 年に遊工房とのコラボレーションプログラムではタイのアーティストが日本の大都市と日本の田舎町、両方に滞在できました。最近新しい事業として芸術祭を開始し、農業者などと協力しながら 2012 年に国内外のアーティストを呼び、地域の中で作品を発表する「糸島芸濃」を開催し、その中アーティストが地域グッズのプロモーションのためにパッケージングなどをデザインしました。

Round Table Discussion

ジェイ・コーによるコメント：



ジェイ・コーはマイクロレジデンスのディレクターたちによるプレゼンテーションと、「マイクロレジデンス」という枠組み自体について整理し、批評する役割を担ったが、第一部のディレクターズ・トークに限定された回答は、マイクロレジデンスの様々な事柄について論じるには不十分と思われる、と述べ、アートの世界や社会そのものにおけるマイクロレジデンスの機能について、より広い視野を持って議論することとなった。コーは、まず評価の重要性について強調し、マイクロについての評価もまた必須であり、単に感想を述べたり、考えを提供するだけではなく、自分たちの立場に対する責任を取らなければならないと述べた。

マイクロレジデンスは新しい用語とみなされるかもしれないが、この用語にすでに関連づけられている言葉もまた慎重に議論されなければならない。これらの定義自体の定義付けもかなり曖昧であろうし、そのひとつひとつの意味を問わなければならない。この用語を定義するために一連の語彙を使うにあたり、私たちのアイデンティティを支え、形成する意味をうまく使って、私たちの立場を整理し、例えば協力者や支援者の関心を引くことにもなるかもしれない。こういった言葉の使い方は、詳細に検討されなければならない。

前のセッションで挙げられた言葉のリストを検証すると、マイクロレジデンスのコンセプトの基盤となっているのは、アートと社会という根本的なコンセプトであるということが分かるだろう。これは、社会改革、コミュニティ、オルタナティブ教育、独立といった言葉の使い方に反映されていて、ここでは私たちは「アートが社会のためにできること」の肯定的な価値を常に持っていることになる。

また、それぞれの定義にはひとつ以上の意味があることも忘れてはならない。私たちは多様な意味を創出する社会に生きており、ここでは限界に遭遇する。アートが手段として活用され、例えば活動家グループに使われると、批評性というアートの可能性が弱まってしまう。その反面、アートが純粹であろうとすると、ナショナリズムと同等になってしまう。つまり問題は複雑性の中のバランスなのである。私たちは、主要なシステムを本質的に批判しながら、社会とどのように関わりたいのかを自問している。だからこそレジデンスが作られたのであり、だからこそ、私たちはレジデンスを運営しているのだ。与えられるものは無く、自分で行うより他は無い。しかし、ここで危険なのは、これを本当に成し遂げるためには批判的なレトリックが必要だということを忘れてしまうことだ。例えば、Res Artis では、個人的な犠牲や資金不足が取りざたされるが、総会ではシステムを批判するようなプレゼンテーションをした人はいない。そのため、それが当たり前だという雰囲気が生み出される。プログラムを運営したければ、犠牲を払わなければならない、それが当たり前だ、と。これは正にフォーコーが言ったことだ。力が最大であると、

それは普通に見えるのだ。

マイクロレジデンスがある特定の言葉を使う時には、そういった言葉の良い面を捉えるべきではなく、その限界も知らなければならない。例えば、「mobile（移動性の）」という言葉の使い方に見て取れる。総会では8〜9の団体が「mobile」という言葉を使い、即座にそれを「nomadic（遊牧の、放浪の）」と結びつけていた。遊牧的な文化は常に周縁化され、排斥される。モンゴルのようにこれが主流である文化では、人々は近代性とどのように相対すればいいのかわからない。ASEF が唯一「nomadic」という言葉を使わずに「mobility」を参照していたと思う。そのレトリックを使う時には、注意しなければならない。

アートと社会の繋がりのために、人間関係を皆は重要視するが、だからこそマイクロレジデンスのプログラムデザインにハートが使われているのである。第一部でフランシスコ・ゲバラが触れた「intimate（親密な）」という言葉を使う理由もこれで説明がつく。こういった言葉を使うのはとても重要なポイントで、マイクロのプロセスの追求、交流を図る対象や主要な構造への批評の創出、皆の上にあるトップ・ダウンの意思決定システム、こういったことには皆はどうすることもできず、現地の知識への敬意も無く、日常的な知識はサインやメタナラティブを通して、主流な知識に対してただ横に並ぶだけだ。

我々は参加型社会に向かって動いている。皆が皆、インターネットを使っておしゃべりし、考えを共有したいようだ。美術教育においても似たような傾向が見られるだろう。アーティストは博士課程に入ることが今まで以上に推奨されるようになっており、別のレベルで自分の創作活動を思考することが求められ、自分の制作について答えを出すことが問われている。修士号が最終的に到達する学位であり、アーティストはただ作品を作らなければならなかった時代とは違うのだ。今、アーティストは作品のために立ち上がり、作品について書かなければならない。

これが実現するのは言語学の問題だ。どのように言語を使って、社会的なプロセスを始め、アーティストとコミュニケーションと持続可能性を大切に思うか、ということだ。例えば、あるコミュニティとの活動がうまく行ったとしたら、仲立ちをする人がちゃんと機能すれば、アーティストがいなくなっても、アイデアは育ち続け、コミュニティが引き継ぐことができるだろう。

批判的なレトリックを作り出したら、最初のセッションのほとんどのプレゼンテーションで使われていたような言語からは離れることができるだろう。アーティストの人数、国の数、来訪者の人数、そういった言葉は捨ててしまえばいい。パワー・ストラクチャーを称えるだけなのだから。

この言語の別の面はオントロジー（存在論）である。我々はどこから来たのか。私は近代的な芸術活動から来たということは認めざるを得ないし、否定もしない。しかし、他の方法を見つけることができる。私たちは作者として、中心的な存在としてのアーティストから離れ、これを関係性やコミュニケーションのネットワークに変容させる方法を考えることができる。私は 2006 年頃からこの関係性について思考しており、その前には何があっただろう

かと自問しなければならなかった。どんなアイデアがすでに確立されているか？どこでそれは起こっていたのか？こういったことの多くを西洋の芸術から受け取ってきたということは否定できない。それは西洋の芸術が支配的な芸術の思想体系であったからだ。

マイクロレジデンスの報告では、例えば、マイクロレジデンスは国際的な文化交流の基盤であるとか、実験のための時間と空間を提供しているというコメントがあるが、この部分についてより徹底的に調べなければならぬだろう。これは曖昧なままにはできない。このつながりは何かと問われているからであり、従って自分たちにとって有益なものが得られるだけではなく、批評という形を追求しなければならない。

私は日本のいろいろなレジデンス施設を訪問した経験から言うと、日本には様々なアーティストのために多くのものが提供されているが、批評家のためのレジデンスは無く、批評的な思考に関する交流が必要とされている。Res Artis 総会での最後のディスカッションでは東西間の闘いがあり、トルコのレジデンスのディレクターは二重性についての問いを挙げた。何故私たちは二重性が必要なのだろうか？何故私たちは物事の善し悪しを決めなければならないのか？パネリストの中にこれについて深く議論しようとした人がいなかったのは残念だ。二重性（duality）はドイツの思想から来ている。これは緊張関係から派生していて、現代にはそぐわない、非常に近代的な考え方である。物事はそうシンプルではなく、全ての物事は複雑で、理性の中には常に感情があり、これかそれかという問題ではないという認識的な先入観が私たちにはある。

対話式討論法という考え方を提案したい。これはポスト・マルクス主義的な批評法で、緊張関係には依拠せずに、多くの矛盾した力が同時に存在していることを認めるものである。私たちは皆、自律的でありたいと思うが、社会的なつながりも欲しいと思う。どちらがどうということではなく、こういった異なる力の相互作用を通して、私たちは人間になったということだ。



Open Round Table Discussion

マイクロレジデンスの立ち位置についての分析をベースに、来場者を交えたディスカッションを行い、出席していたレジデンスのディレクターたちと意見を交換した。以下のような発言があった：

トロントを拠点とし、現在は日本でも活動をしているアーティストのダイスケ氏は、東北でアートプログラムを立ち上げ、アーティストが世界中から集まり、その地域に滞在して、地元コミュニティの活動をする計画を考えている。彼が関わっている地域は東日本大震災で甚大な被害を受け、多くの資源やインフラが破壊された。そのため、文化交流を通じて地域を再び活性化するプロジェクトを行いたいと考えている。この地域にマイクロレジデンスを作り、クリエイティブコミュニティを段階的に構築して、5年から10年後には、アートコミュニティセンターを設立することを目指している。ダイスケ氏はジェイ・コーにどのようにこの目標を達成すべきか、アドバイスを求めた。

ジェイ・コーは、アーティストの選定が重要であると強調した。コミュニティと活動するにあたり、二種類のアーティストが想定できるだろう。アーティストであり活動家であるような人は、目的意識が明確であるため、プロジェクトを強力に推進し、より早く結果を出すだろう。しかし、このタイプは自分自身が中心的なリーダーになるため、地元の人々は責任を持たなくなり、長期的にプロジェクトに関わろうとはしないだろう。一方で地元の人々との話し合いに対してよりオープンな方法を取るアーティストは、持続可能な発展が実現する可能性がより高いだろう。アーティストがコミュニティにやって来て、何かを強要すると、地元の人々は自分たちがメンバーであるという感覚が無く、知識も持っていないため、アーティストがプロジェクトを離れると、プロジェクト自体が止まってしまう恐れが常にある。従って、時間を掛けて、意味のある関係性を築き、地元の人々と知識を共有し、プロジェクトが自分た

ちのものであることを実感すれば、彼らによってプロジェクトは発展し、知識を得て、彼ら自身の可能性を思考することができるだろう。ジェイ・コーは、恐らく両方のタイプのアーティストがいることが最善だろうと述べた。短期的な目標は達成できるだろうし、また長期的かつ有機的なプロセスも、両方のタイプのアーティストがお互いから学び合うことができるのではないだろうか。

ダイスケ氏はどのアーティストを呼ぶかを考える段階ではないが、地元の人々とシステムを立ち上げる方法を考えるべきかもしれないと答えた。ジェイ・コーは、それは彼がどれだけ地元の人々をよく知っているかにもよるし、彼らとどのような関係性を築きたいかにもよるとコメントした。ダイスケ氏は関係性はまだごく初期の段階であると話した。ジェイ・コーは、人間関係の発展において気付きが重要であり、見知らぬ人が知り合いになり、参加者から協力者になるプロセスについて説明した。それぞれの段階特有の懸念事項があるが、信頼のレベルは地元の人々が一緒に活動したいと思う気持ちの度合いを決定するだろう。常に人々に自分自身の道を進む手段を与え、関係に応えていく方法を考える必要があると再び述べた。



Eliza Roberts – Asialink (Australia)

「マイクロは大きなマクロシステムへのリアクションであるという観点に戻りたいと思います。我々 Asialink はそのふたつの間で活動しています。Asialinkはオーストラリアで最大の国際的なレジデンスプログラムです。毎年、16の助成団体に申請し、35人のアーティストをアジアのレジデンスに送り出しています。実際のところは、私たちの運営スタイルはマイクロレベルであると言えます。レジデンスプログラムを運営しているのは1名、つまり私だけで、サポートやパートナーシップのレベルもマイクロです。Asialinkはレジデンススペースは持たずに、オーストラリアやアジアのホスト機関との協力関係からネットワークを築いています。

Res Artis 総会では、理想のレジデンスを追求しているようでしたが、私はそれは存在しないと思っています。アーティスト、ホスト、資金提供者、それぞれによってニーズも要求も異なります。Asialinkはオーストラリア人アーティストをアジアへ派遣しますが、交流もしていますし、より持続可能で意味のある方法で交流を深める方法を検討するレジデンシーラボも立ち上げました。」

Janwillem Schröfer(Ex-Director, Rijksakademie, The Netherlands)

ヤンウィレムもマイクロのポテンシャルをマクロからの論点に持ち込み、RAIN ネットワークについて紹介した。RAIN ネットワークは、ライクスアカデミーのレジデンスプログラムに参加したアーティストから発展したもので、アジア、アメリカ、南アメリカのアートコレクティブやレジデンスプログラムをつないでいる。マクロから派生したマイクロが、権力的な機関を越えていく様子を示した。

更に、「independent」という言葉について議論し、こういった言葉が使われる状況を問いかけた。我々は何から独立しているのか。「独立」の定義は何か。政府から独立しているのか。出資者からか。それ以外からか。ある組織が外部資金に依存していなくても、自らを支援するコミュニティがあれば、それは依存状態にあると言える。こういった依存状態を求め、関心を持ち、否定はせず、隠さずにいるべきだ。ジュリー・アップメイヤーのプレゼンテーションを重要な例とし、自身のレジデンスプログラムにある依存状態を認め、参加するアーティストにもはっきり伝える正直でオープンな点を高く評価した。

更にヤンウィレムは継続の重要性を強調し、組織のライフサイクルとアーティストの生涯は分けて考えられるべきだと述べた。アーティストの生涯は変化しながら進んでいくため、アーティストの生涯の力はとても強く、多くの場合、組織の寿命を超えて続いていく友情のような関係を私たちは築いている。

Karol Frühauf (Founder, Bridge Guard Art & Science Residence Centre, Switzerland)

「私はエンジニア・ランのアーティスト・イン・レジデンスを運営していますが、まだそれはマイクロレジデンスだと思っています。こういった言葉（様々なプレゼンテーションから集められたキーワード）の中で感情に関わるものが二つだけだったということにとっても驚きました。他は全て頭で思考するものでした。出会いが無く、経験がなく、喜びも楽しみもない、だから私はここにいるのです。」

Kadija de Paula (Residencias en Red, Brazil)

「私たちが行っていることにはボランティアとしての仕事が多々あり、どれだけの人が数年後に続けられているだろうかと考えます。私たちはこの状況に不満もあるでしょうが、実際はもっと前向きに受け止めないといけないのではないのでしょうか。私たちがこうしている理由は、それが楽しいからだということに気付くべきではないのでしょうか。アーティストにとつての喜びだけではなく、主催者も同じく感じているでしょう。おそらくプロフェッショナル性には足りないかもしれませんが、資金繰り等に影響を与える力から、私たちが行っていることに関する金銭では計れない価値への重要なシフトがあると私は考えています。もちろん、私たちは不安定な方法で物事を行い続けるべきではありませんが、私たちが持てるリソースを人々と共有するべきではないのでしょうか。」

Antti Yllonen – artist, member of Kulttuurikaupilla and co-director art break (Finland)

アンティは、社会はアーティストの貢献に対してもっと理解するために、視点を改めるべきではないかという考えを踏まえ、アーティストの作品の評価方法について問いかけた。アーティストは、モチベーションの一部ではありながらも、楽しいからという理由だけで作品制作を追求しているわけではないと強調した。彼らは食べていかなければならない。彼らは価値のある仕事をしているのだから、時に報酬を支払われなければならないのは不合理だ。アーティストをボランティアと捉える考え方がまだあり、特にフィンランドではそうだとアンティは感じているが、アーティストは何の報酬も無しに様々なことを貢献するように頼まれることがしばしばある。

Mari Ishiwata – artist, director of Ishiwata Residence

イシワタはボランティアという言葉に感じる好奇心とためらいについて述べた。東日本大震災でボランティア精神が高まって以来、この言葉は新しい意味を持つようになったため、社会に対して善いことをするというと強く結び付くようになった。しかしアートマネジメントの場合は、ボランティアは楽しみや喜びのために行うことで、その場合は私たちはボランティアとは言えないのかもしれない。アートと社会は切り離せないものであり、フレキシブルにアプローチする必要があることを強調した。

Julie Upmeyer

締めくくりとして、ジュリーは報酬とお金は同じだというのはあまりにも単純化しすぎであると述べた。自分にとって何が報酬かを定義するのは個人次第で、最も重要なのは、アートプロジェクトにおいては、皆がその人のニーズと何をもって報酬と考えるかを理解していることだとコメントした。

村田達彦

達彦は、議論の多くがアーティストとアーティスト・ラン・スペースの役割に集中していたことを振り返り、今後マイクロレジデンスの定義付けに繋がることを期待してディレクターズ・トークを締め括った。彼自身は技術者としてのバックグラウンドがあり、それからアーティストの仕事について理解を深めるようになった。しかし、社会でのアーティストの役割、特に日本の社会でのそれについて理解を得るにはまだ道のりが長いと感じている。アーティストには社会に対して重要な貢献をしており、このことは正しく評価され、更に発展させられるべきだと述べた。このイベントでは、少数のマイクロレジデンスが集合したが、世界には何千というマイクロレジデンスが存在し、この過程にも力を貸してくれるのではないかと期待している。



本印刷物は Web にて公開しています。 www.youkobo.co.jp/microresidence
また、関連の詳細記録も併せて参照頂きたい

- ・ 本冊 MICRORESIDENCE! 2012
- ・ 別冊1 — マイクロアーカイブ - 31 軒のマイクロレジデンスの紹介
- ・ 別冊2 — マイクロ・ディレクターズ・トーク・2012 年 10 月 30 日の記録
- ・ 別冊3 — AIRs ほんとうの話 2012 年マイクロレジデンス編
- ・ 別冊4 「小さなアートの複合施設から大きな可能性を！」
— マイクロレジデンスの調査研究（中間報告） 2012 年 6 月発行

This document is also available online www.youkobo.co.jp/microresidence

This is also accompanied by supplementary materials providing further detail on microresidencies

- ・ Main booklet MICRORESIDENCE! 2012
- ・ Supplement 1 — Micro Archive – An introduction to 31 Microresidencies
- ・ Supplement 2 — Micro Directors Talk Document – 30th October 2012
- ・ Supplement 3 — Open Talk about AIRs Microresidence Series 2012
- ・ Supplement 4 The Macro Possibilities of a Micro Art Space
— An Interim Report on Microresidence Research published June 2012

MICRORESIDENCE! 2012

アーティスト・イン・レジデンス、マイクロレジデンスからの視点
Artist in Residence, from a Micro Perspective

協力 Res Artis, Trans Artists, Trans Cultural Exchange
東京ワンダーサイト、J-AIR ネットワークフォーラム、
AIR-J (国際交流基金)
寄稿 日沼禎子・女子美術大学
助成 文化庁・文化芸術の海外発信拠点形成事業
EU・ジャパンフェスト日本委員会
発行者 遊工房アーツスペース www.youkobo.co.jp
編集責任者 村田達彦
編集 村田弘子、金井詩子、太田エマ、梶田有理
翻訳 鈴木慶子、金井詩子、太田エマ、ジェイミー・ハンフリーズ
写真撮影 柳場大
デザイン 前田龍一

発行 2013 年 2 月
〒167-0041 東京都杉並区善福寺 3-2-10 遊工房アーツスペース
Tel 03-5930-5009 FAX 03-3399-7549 e-mail info@youkobo.co.jp

Cooperation Res Artis, Trans Artists, Trans Cultural Exchange
Tokyo Wondersite, J-AIR Network Forum,
AIR-J (Japan Foundation)
Contributor Teiko Hinuma, Joshibi University of Art & Design
Support The Agency of Cultural Affairs, Japan
EU-Japan Fest! Organizing Committee
Publisher Youkobo Art Space www.youkobo.co.jp
Editing in Chief Tatsuhiko Murata
Editing Hiroko Murata, Utako Kanai, Emma Ota, Yuuri Kabata
Translation Keiko Suzuki, Utako Kanai, Emma Ota, Jaime Humphreys
Photo Masaru Yanagiba
Design Ryuichi Maeda

Published February 2013
〒167-0041 Tokyo Sugninami-ku Zempukuji 3-2-10 Youkobo Art Space
Tel 03-5930-5009 FAX 03-3399-7549 e-mail info@youkobo.co.jp